

因みに農林水産省のジーンバンク構想は、既存の農業生物資源研究所にある種子貯蔵庫（5万点収容）を、さらに10万点の貯蔵能力のある貯蔵庫を建設し、あわせて15万点とするほか、その他の各試験研究機関と馬鈴しょ、茶、サトウキビの原原種農場、林木育種場で植物遺伝資源を、また畜産試験場等と種畜牧場で動物遺伝資源（水産生物等の遺伝資源は水産研究所等で）を保存しようという大規模なものである。

これにより、植物遺伝資源についていえばアメリカの30万点、ソ連の25万点に次ぐ規模にしようというものである。

そのほか体制面では同省のバイオテクノロ

ジー研究の中核的研究機関として、58年12月「農業生物資源研究所」を設立したほか、59年4月には前述のとおり、農林水産技術会議事務局に「バイオテクノロジー室」を設置し試験研究と結びつけたバイオテクノロジー行政の総合調整を進めている。

さらに文部省においても、58年5月「バイオサイエンス委員会（座長山村雄一大阪大学学長（当時））」を設置し、大学における「生命科学」研究のあり方について検討を進めているほか、民間との共同研究や民間からの委託研究により、バイオテクノロジーの応用研究も積極的に推進している。

あんな話・こんな話

① 川越・川小商店のいわれ

初代は朝霞の農家出身。斉藤小平次。

当時、埼玉のイモはどれも川越イモといわれていた。それで川越の小平次ということで店の名にした。

② 生産者の立場に立って

小平次は東京へ持って行ったイモが思うように売れないもので、東京へ出て焼芋屋になった。

もともと生産者だったので、生産者の身になってイモを買ったから、品物が方々から集まった。それで問屋組合に入り、甘藷問屋になった。

③ 舟荷

当時、東京の甘藷問屋の多くは川っぶちにあった。

大正12年の関東大震災までは、荷がほとんど舟便だったからだ。

大震災後は舟便がなくなり、自動車便になったので、川とは関係がなくなった。

うちは隅田川の駒形橋の際にあるが、今東京の甘藷問屋10軒中、川っぶちにあるのはうちだけだ。

④ つぼやき

大震災前の焼芋は、大きな土がまを築いて、鉄の浅い鍋で焼いていた。焼芋は当時のスナックだったが、震災後はいろんなものが現われ、売れなくなった。

たとえばパン屋といえば、震災前は銀座の木村屋か、上野の藤村（ふじむら）ぐらいだったのが、急にふえた。

それで廃業する人が多かった。

もっとも、ツボヤキ屋はふえた。ただそれも5年と続かず、大学イモになった。

15頁に続く